須賀川市教育研修センターだより　第 130 号

「　み　ち　」

令和５年１月２０日 発行

新年おめでとうございます。

令和５年を迎え、３学期が無事スタートしました。今年の干支は「ウサギ（卯）」です。卯年は、芽を出した植物が成長していき茎や葉が大きくなる時期で、目に見えて大きく成長する年だといわれています。また、ウサギは跳びはねることから、「飛躍する」という象徴になります。子どもたちや教職員がそれぞれの思いを持って大きく飛躍できる一年にできるよう、何事にも真摯に全力で取り組んでいきたいものです。

学校を取り巻く社会の流れも、様々な面で飛躍する年を迎えたと言ってもいいでしょう。現在、中央教育審議会では、第４期教育振興基本計画の策定について議論が行われており、先月には、これまでの審議計画の報告素案が公表されています。「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」をコンセプトとして、2023～2027年度に教育委員会・学校現場などで取り組んでいく内容が掲げられています。

また、須賀川市教育振興基本計画案（2023～2032年度）が示され、市民の皆さんからの意見が募集されました。「ともに学び　ともに育ち　ともに生きる　未来へつなぐ人づくり」を基本理念として、令和５年度からの10年間を見据えて様々な教育施策を推進していくことになります。

コロナ禍後の新しい学校教育を模索して、教育課程編成が進められていることかと思いますが、今、社会で取り上げられ、議論されていることを、自分の学校ではどのように具体化していくのかを、教職員一人一人が自分事として知恵を出し合っていくことが大切です。

「当たり前」は、ほんとうに当たり前なんだろうか？

そんなことを考えながら、ほんとうに大切なことを改めて確認していきたいものです。

授業について一緒に考えていきましょう

「ジャンプアップ研修」を通して、教職経験が浅い先生方や講師の先生方などと、授業づくりについて様々な形で研修してきました。受講されている先生方は、授業だけでなく、学級経営、子どもの見方、子どもとの関わり方など、多方面から教師としての資質向上を目指して、真摯に取り組んでいます。短い３学期にも、効果的な研修ができるようお手伝いをしていきたいと考えています。

また、「ジャンプアップ研修」受講の先生方以外のみなさんも、気軽にセンター指導主事等にご連絡ください。日頃の授業づくりや子どもとの関わりについての悩みなど、一緒に考えていきましょう。

「当たり前」について考えてみました

◇　今から20年ほど前、お仕えした校長先生がよくこんなことをお話しになっていました。

「学校の先生方が、専門家として、ほんとうに教えなくちゃいけないことを教えることができるような世の中になるといいね―。そして、放課後、合唱が好きな子は〇〇に、サッカーが好きな子は□□に、絵を描くのが好きな子は△△に集まって、それぞれ活動する―。」

今、様々な議論が進められている「学校の部活動（休日の活動）の地域移行」に重なってくる話題でした。当時、学校の「当たり前」とも言える部活動や小学校の特設活動が、現在のような状況になってくるとは、夢にも思いませんでした。みなさんは、いかがでしょう。

◇　今でこそ、あまり話題にならなくなりましたが、「押印」の頻度はどうでしょうか？さすがに学校現場では、出勤簿なるものがあるので（当センターも同様ですが……）、毎日押印する機会があります。学校から保護者に対して押印を求める機会は減ってきているのが現状ではないかと思います。社会生活をしていく中で、私たちが印鑑を必要とする場面は、ごくごく限られたものになってきましたが、この押印、「当たり前」なのでしょうか。

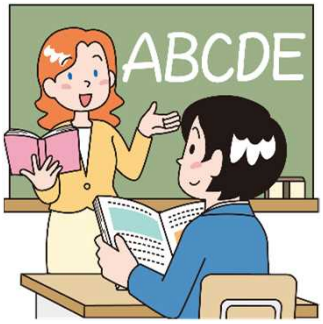
◇　教頭時代、校長先生からこんなご指摘をいただいたことを覚えています。

「教頭先生、どうして、今年度特別支援学校に入学した〇〇さんに、運動会の案内を出さないのですか？」と……。「地域の子どもは、地域で育てる、とよく言っていますよね。〇〇さんは本来、うちの学校に入学するはずだったお子さんですよね。」

正直、“今まで、そんなことしたことありませんでしたから……”と思ったのは事実でしたが、日頃からの校長先生の言動から考えると、ごく当たり前のことでしたので、返す言葉が見つかりませんでした。これまでの「当たり前」は、校長先生の「当たり前」とは違ったのです。どの視点から見た「当たり前」なのかということも、決して忘れてはいけない視点だと思います。

◇　『不親切教師のススメ』（松尾英明著）という題名に惹かれ、手にした一冊です。1月はじめに「日本教育新聞の書評」にも掲載されており、学校の「当たり前」を考える一つの視点を与えていただきました。

“著者が定義する「不親切教師」が目指す方向の一つが子どもの主体性の向上。教育における真の親切とは、子どもを自立へと促す行為であるという。……二つ目は、教師の仕事の精選による負担軽減。子どものためと多くの時間を費やすことが、自立を阻むことになっていたとしたら―。本書を手に本当に必要なことを見極めていきたいものである。”（日本経新聞書評より）



本書は、49の視点から学校の日常について問いかけています。そのすべてを「そうだよなぁ」と納得できるかというと、そうではない部分もありましたが、子どもの自立を促すという面から考えると、必ずしも否定する内容ばかりではありませんでした。「学校の常識は、社会の非常識」などと言われたこともあります。私たちは、これからの時代を担う子どもたちに、どんな成長を願って寄り添っていくのかをしっかり考えていきたいと思います。お読みになる先生方は、どんな感想をお持ちになるのでしょう。